

# 書評

マークス臨床生化学 ▶ M. Lieberman, A. Peet 著／横溝岳彦 訳

マークス臨床生化学／M. Lieberman, A. Peet 著／横溝岳彦 訳／医学書院 2020／A4判 639ページ 8,500円＋税

この教科書はタイトル通り、生化学と臨床をつなぐさまざまな工夫がなされている。その上で生化学の内容説明は極めてオーソドックスかつ明解である。さらに特筆すべきは、全編を通じた単独訳者による翻訳が大変こなれており、軽快に読み進められることである。したがって、医学部生に最適であると同時に非医学系の学生にとってもよい教科書になると思う。

構成は独特で、大きく6編に分かれている。I エネルギー源代謝、II 生化学の化学的・生物学的基礎、III 遺伝子発現とタンパク質合成、IV 炭水化物の代謝、エネルギー源の酸化、アデノシン三リン酸の生成、V 脂質代謝、VI 窒素代謝。特に導入の第I編に摂食-絶食サイクルの話が登場するのは生化学の教科書としては異色である。生化学にも色々な分野があり、例えば生体物質の構造や酵素複合体の複雑な作用機序などに有機化学的関心を持つ人など、学習する者の興味も人それぞれであろう。けれど生物の代謝を考えると、一番なじみが深い生物はヒトであり、これを勉強することは自分自身を知ることでもある。そのように考えるとこの構成は納得がいく。また、それぞれの章は常に代謝の相関を意識して記述されており、特に、「エネルギー代謝制御の基本概念」や「糖代謝と脂質代謝の統合」のような章が充実していることが特徴で、これをていねいに勉強すれば、各論的に学んだ事項がここでつながり、ヒトの体は代謝連携の上に成り立っていることがはっきりと理解できる。

この教科書を開いてまず目に飛び込んでくるのは、ヒトの顔の絵記号であろう。章の初めに「待合室」と称して、

女性、男性、乳幼児の顔のアイコンが出てくるのである。これは章の内容と関連がある患者が待合室に居るという設定で、症状などが説明されている。ここは極めて臨床的で、特に臨床実習後の学生が生化学を勉強し直したいというようなときに、よい導入となるだろう。欄外には随所に聴診器とピペットのアイコンが出てくる。前者は待合室の患者に関する「臨床ノート」を表していて、本文の生化学的説明と患者の症状や発症原因との関連が説明される。後者は臨床検査に使われる方法やその原理についての解説である。これらは、既に生化学の知識を持っている者にも興味深い内容であるし、しばしば本質的な点を突いていて注意を喚起させられる。欄外には、簡潔な質問が置かれており、その答えは必ず次のページで見ることができ、本文の理解に有用である。

章末には、理解し記憶すべき点をまとめた「キーコンセプト」、「臨床コメント」、そして「生化学コメント」がおかれて締めくくられている。

また、全編を通して好ましく思うのは、図がすっきりとして配色もセンスがよく、分かりやすいことに加え、本文の進行に対してよいタイミングで図が用意されており、ストレスなく読み進められることである。最後に、5択形式の演習問題はwebサイトで見ることができ、その解答に説明が付いているので理解がしやすい。

以上述べたように、他に類を見ない「臨床」生化学の教科書として、医学部生にはもちろん、非医学系の学生にも推薦できるし、また教員や研究者が読んでも、新しい発見があるだろう。

中村和生（北里大学名誉教授）